

「色素による消化管内視鏡検査法」

〔編集〕 竹本忠良・川井啓市

鳥取大学助教授・内科

田 中 弘 道

X線と内視鏡とが支え合って早期胃癌の診断に取り組んでいた頃、Endoscopist にとって最も苦手なことの1つは微細なニボー差を正確に指摘することであった。X線的には二重造影法によって美麗に胃小区模様を描写することが可能であったが、内視鏡的には多くは色調差として認識され、微細な凹凸像を観察することは困難であった。

このような事情を反映して、細かな形態学的変化の観察能向上のために幾つかの工夫がなされたが、その1つに順天堂大学グループによる色素撒布を応用した内視鏡検査法があり、症例によっては胃小区像の観察まで可能であることが明らかにされた。

他方、これとほぼ前後して大阪成人病センター奥田らによってコンゴローレッド法が発表され、内視鏡検査を応用した機能的診断法の可能性が示された。

しかし、何といても色素内視鏡検査法を大きく飛躍させたのは、川

井・井田らによる方法論の確立と、竹本・吉井・鈴木らによる本法の基礎的研究とであったといえる。現在では、すでに学会内に色素内視鏡研究会も生れ、日常診断の場にも広く応用されようとしていることは周知の通りである。この期に、本法の新しい展開者である竹本教授と川井教授の編集によって「色素による消化管内視鏡検査法」が出版されたことは誠に意義深いことである。

序文によると、執筆計画から出版まで1年を要しないスピード振りであったという。これは本書の執筆者がいかに活発に、いかに自信をもって進められた仕事であったかを端的に物語るものであろう。一読しただけでも、各項目の連なりも滑らかで各所にあふれんばかりの意欲を感じとらずにはいられない。

本書は、消化管粘膜への撒布色素・着色（染色）色素、蛍光色素およびコンゴローレッド応用の歴史と展望について述べられ、色素剤の選択条件、色素内視鏡像解析の基礎的事

項について述べられている。次いで各論的に食道・胃・十二指腸・大腸の色素検査法が解説されているが、同時に今後に残された問題点が明確に指摘されている。この点だけについてみても、新しい研究者にとっては大変参考になる著書である。

本書を通読すると、胃の微細所見を観察しようとして出発した色素内視鏡検査法が、現在ではほとんどすべての消化管に適応され、いかに詳細な単位での観察が行われているかが一目瞭然であるが、同時に内視鏡検査を介して機能検査法としての分野が展開されつつあることに改めて驚かされるはずである。

方法論や形態学的診断に止まらず形態的变化が物語る機能異常をも見逃すまいとする筆者らの観察態度は、研究者にとっても、臨床家にとっても示唆されるべきところは大きいと考える。とくに、若手研究者には是非一読をおすすめしたい著書である。

B5 頁180 図48 写真43 原色図214
¥ 16,500 千 200 医学書院刊